

原 著

急性期医療機関における職場復帰支援

—「復職調査票」を利用した支援の試み—

砥上 恵幸, 富永 俊克

山口労災病院勤労者リハビリテーションセンター

城戸 研二, 黒川 陽子

同 整形外科

(平成18年2月28日受付)

要約：労災病院にとって患者の早期職場復帰を支援することは社会的使命である。しかし、現在医療機関の在院日数は急激に短縮しており、そのため新しい支援方法を創造しなければならない。我々は、急性期医療機関における職場復帰支援システムを考えた。方法は、「調査票」を用いて患者の職場復帰状況の把握と、「復職カンファレンス」を実施することで職場復帰に対する対応方法を検討することである。

調査期間は、2004年6月16日から2005年8月20日までの期間とした。対象は調査期間にリハ科紹介のあった新患1,805名で、「復職調査票」を回収できたのは1,149名であった。その内「復職カンファレンス」を開催したのは105名であった。カンファレンスの結果、理学療法士や作業療法士がアドバイスしたものが61.9%であった。また、在院日数短縮の影響で、職場復帰に対して十分なアドバイスが行えないが、患者の職場復帰に対する早期からの方向性を決めることができたと考えている。これからも、職場復帰支援に積極的にかかわることで、勤労者医療を担っていきたい。

(日職災医誌, 54: 95—98, 2006)

—キーワード—

急性期医療機関, 復職調査票, 復職カンファレンス

はじめに

労災病院グループのリハビリテーション（以下リハと略）科にとって、患者の早期職場復帰を支援することは社会的使命である。しかしながら、医療機関の在院日数短縮化傾向は現在急激に進行しており、このことを考慮すると、これまでにはない新たな支援方法の創造が不可欠であり、我々にとって急務といえる。

そこで我々は、急性期医療機関における職場復帰支援システムを考え、平成16年6月から試行している。以下に、その実施内容と、結果などについて若干の考察を踏まえ報告する。

職場復帰支援システムの紹介

まずリハ開始時に、高齢勤労者を考慮し16歳以上のすべての患者あるいはその家族が、我々が作成した「復職調査票」（図1）に必要事項を記入することとしている。調査票は、職業分類、作業内容、作業環境、就労形態、勤続年数、通勤手段、職場への復職希望、職場復帰に対する不安の有無、医療専門職へのアドバイス希望の有無、フォローアップに関する同意欄、転帰記載欄などで構成してある。次に、主に「復職調査票」で職場復帰に際してアドバイスを希望した患者に対し「復職カンファレンス」を開催する。「復職カンファレンス」の目的は、職場復帰に際し、何らかの対応を希望した患者に対する我々の対応方法を検討することである。カンファレンスは、毎週月曜日と金曜日に開催している。カンファレンスは、リハ科専門医、理学療法士、作業療法士、言語聴覚士といったリハスタッフで行っている。

「復職カンファレンス」での職場復帰に対しての検討

復職調査票

	結果	
	記入日 H 年 月 日	
	生年月日 年 月 日 (才)	
	診断名	
	発症日 年 月 日	

太線で囲んである部分をできるだけ全ての項目に記入をお願いします。
ご記入頂いた個人情報は病院外に出ることはありません。

<p>1. あなたの職業は何ですか？</p> <table style="width: 100%; font-size: x-small;"> <tr> <td>A: 専門的・技術的職業</td> <td>B: 管理的職業</td> </tr> <tr> <td>C: 事務</td> <td>D: 販売業</td> </tr> <tr> <td>E: サービス業</td> <td>F: 保安職業</td> </tr> <tr> <td>G: 農林漁業</td> <td>H: 運輸・通信業</td> </tr> <tr> <td>I: 生産工程・労務作業</td> <td>J: 分類不能の職業</td> </tr> <tr> <td>K: 主婦</td> <td>L: 学生</td> </tr> <tr> <td>M: 無職</td> <td>N: その他 ()</td> </tr> </table> <p>2. あなたの仕事の内容についてお聞かせ下さい。</p> <p>労働内容: ()</p> <p>就労に必要な能力: <input type="checkbox"/>座る <input type="checkbox"/>立つ <input type="checkbox"/>歩く <input type="checkbox"/>走る <input type="checkbox"/>しゃがむ (複数回答可) <input type="checkbox"/>階段を昇る <input type="checkbox"/>ハシゴを登る <input type="checkbox"/>運転・操縦 <input type="checkbox"/>押す <input type="checkbox"/>引く <input type="checkbox"/>持ち上げる (kg) <input type="checkbox"/>指でつまむ <input type="checkbox"/>握る <input type="checkbox"/>話す <input type="checkbox"/>聞く <input type="checkbox"/>読む <input type="checkbox"/>書字 <input type="checkbox"/>計算 (暗算) <input type="checkbox"/>その他 ()</p> <p>3. 作業環境についてお聞かせ下さい。(複数回答可)</p> <p>作業場: <input type="checkbox"/>戸外 <input type="checkbox"/>戸内 <input type="checkbox"/>両方 (戸外、戸内) <input type="checkbox"/>高所 <input type="checkbox"/>地下 <input type="checkbox"/>その他 ()</p> <p>共同作業: <input type="checkbox"/>多い <input type="checkbox"/>普通 <input type="checkbox"/>少ない</p> <p>危険性: <input type="checkbox"/>機械的 <input type="checkbox"/>火傷 <input type="checkbox"/>電氣的 <input type="checkbox"/>爆発 <input type="checkbox"/>感染 <input type="checkbox"/>放射性 <input type="checkbox"/>有毒性 <input type="checkbox"/>その他 ()</p> <p>4. 就業および勤務形態は何ですか？</p> <p>就業形態: <input type="checkbox"/>正規 <input type="checkbox"/>パート <input type="checkbox"/>その他 ()</p> <p>勤務形態: <input type="checkbox"/>常日勤 <input type="checkbox"/>交代制 () <input type="checkbox"/>その他 ()</p> <p>5. 従業員数はどのくらいですか？</p> <p><input type="checkbox"/>～50 <input type="checkbox"/>～100 <input type="checkbox"/>～500 <input type="checkbox"/>500以上</p> <p>6. 現在の職場での勤務年数は何年目ですか？ 年目</p>	A: 専門的・技術的職業	B: 管理的職業	C: 事務	D: 販売業	E: サービス業	F: 保安職業	G: 農林漁業	H: 運輸・通信業	I: 生産工程・労務作業	J: 分類不能の職業	K: 主婦	L: 学生	M: 無職	N: その他 ()	<p>7. 通勤手段は何ですか？(複数回答可)</p> <p><input type="checkbox"/>自家用車 <input type="checkbox"/>公共機関 (バス・電車) <input type="checkbox"/>徒歩 <input type="checkbox"/>自転車 <input type="checkbox"/>バイク <input type="checkbox"/>その他 ()</p> <p>8. 通勤時間はどのくらいですか？ 時間 分</p> <p>9. 職場 (雇用形態など) に対して満足していますか？</p> <p><input type="checkbox"/>満足 <input type="checkbox"/>やや満足 <input type="checkbox"/>やや不満 <input type="checkbox"/>不満</p> <p>10. 職場においてストレスがありますか？</p> <p><input type="checkbox"/>ある <input type="checkbox"/>少しある <input type="checkbox"/>ほとんどない <input type="checkbox"/>ない</p> <p>11. あなたはストレスの解決策がありますか？</p> <p><input type="checkbox"/>ある <input type="checkbox"/>少しある <input type="checkbox"/>ほとんどない <input type="checkbox"/>ない</p> <p>12. あなたは現在の職場への復職への希望はありますか？</p> <p><input type="checkbox"/>はい <input type="checkbox"/>いいえ <input type="checkbox"/>その他 (配置転換など)</p> <p>13. あなたが復職されるのに不安な事がありますか？</p> <p><input type="checkbox"/>はい <input type="checkbox"/>いいえ</p> <p>それはどういった不安なのかをお聞かせ下さい。</p> <p>()</p> <p>14. 当院では復職に関するアドバイスも行っていますが、あなたはアドバイスを希望されますか？</p> <p><input type="checkbox"/>はい <input type="checkbox"/>いいえ</p> <p>アドバイス内容: ()</p> <p>将来、復職に対しての調査をお願いすることがあるかもしれませんが、よろしいでしょうか？</p> <p><input type="checkbox"/>同意する <input type="checkbox"/>同意しない</p> <p style="text-align: right;">H 年 月 日</p> <p style="text-align: right;">住所 〒</p> <p style="text-align: right;">氏名</p>
A: 専門的・技術的職業	B: 管理的職業														
C: 事務	D: 販売業														
E: サービス業	F: 保安職業														
G: 農林漁業	H: 運輸・通信業														
I: 生産工程・労務作業	J: 分類不能の職業														
K: 主婦	L: 学生														
M: 無職	N: その他 ()														

入院日	H	年	月	日
リハ開始日	H	年	月	日
退院日	H	年	月	日
<input type="checkbox"/> 転院 <input type="checkbox"/> 在宅 <input type="checkbox"/> 復職、復職予定 (頃) <input type="checkbox"/> 転職 <input type="checkbox"/> 不明 <input type="checkbox"/> その他 ()				

山口労災病院 勤労者リハビリテーションセンター 2004.12

図 1

結果は、①理学療法士、作業療法士、言語聴覚士のアドバイス ②医師のアドバイス ③「復職プログラム」実施 ④後日再検討 の4つに分類した。「復職プログラム」は、復職調査票同様、現在我々が開発・試行しているものであり、作業内容や職場環境について一定の様式を利用し聞き取り調査を行い、その結果を理学療法、作業療法、言語聴覚療法のプログラムへ反映するものである。具体的な運動・練習プログラムとしては、患者の実際の作業内容を考慮し、脚立の上り下りや重量物運搬の練習などを実施した。また、必要に応じて患者同伴での職場訪問も行うことにしている。

結 果

平成16年6月16日から平成17年8月20日までの期間に当科に紹介のあった新患者数は1,805名だった。その内「復職調査票」を回収できたのは1,149名で、学生29名、主婦122名、無職643名、日常的に何らかの職業に就いている患者は355名であった。復職カンファレンスは、105名 (男性65名、女性40名、平均年齢47.3歳) に対し実施した。1回のカンファレンスで平均約2名の

検討を行った。診断群分類の概略は、下肢骨関節疾患が57名、脊椎・脊髄疾患が23名、上肢骨関節疾患が17名、脳卒中中等が7名であった。

職業分類の結果は、生産工程・労務作業が38名、専門的・技術的職業が22名、サービス業が15名、主婦が7名であった。

カンファレンスでの検討結果は、理学療法士、作業療法士、言語聴覚士によるアドバイスを行ったものが65名、後日再検討としたものが18名、医師によるアドバイスを行ったものが16名、復職プログラムを行ったものが6名であった。アドバイスは、具体的には、病気の説明や注意すべきことの指導、そして、職場の労務管理者との面談や専門的リハセンターの紹介などを行った。「復職プログラム」を開始したもののなかには、開始当初は精力的にプログラムを実施したにもかかわらず、入院期間の問題で十分なプログラムを行えずに退院した患者が多いという印象があった。また、職場を患者同伴で訪問し、実際の職場で、種々のことを確認した者もあり、その結果をプログラムに反映することができた。

症例紹介

症例は、35歳の女性で右片麻痺の患者である。麻痺側の運動機能レベルは、SIAS (Stroke Impairment Assessment Set) で上肢が5-4、下肢は3-3-1だった。能力レベルとしては、FIM (Functional Independence Measure) が123点であり、身の回り動作は自立していた。歩行能力は、短下肢装具を装着し杖歩行が自立しており、平坦な場所であれば独歩が可能だった。「復職調査票」にて患者が希望したアドバイス内容は、①学校のトイレを使用することができるか ②トイレを改修するとしたらどのようにすればいいのか ③階段や段差の多い職場で、教材を持って移動がうまくできるか、といったことだった。我々は、「復職調査票」だけでの情報収集では不十分と判断し、患者の希望と職場の理解もあったため職場訪問を実施した。その結果、主に仕事をしている場所と階が違うもの一カ所だけ洋式トイレがあり、手すりを設置すれば使用可能なこと、仕事場近くの和式トイレも手すりを設置すれば使用可能なことがわかった。また、確かに階段や段差が多い職場ではあるが、リュックタイプのバッグを利用するなどの教材を運ぶ方法を工夫することで克服できることがわかった。職場訪問には、職場の同僚と上司が同伴したため、患者の障害について説明し、職場復帰に際し協力が得られることも把握できた。職場訪問後、理学療法ではリュックタイプのバッグなどに重量物を入れて積極的に階段昇降練習を行うなど、実際に職場を見て把握できたことをプログラムに反映した。

考 察

病院の急性期化は、病床稼働率が高くなり、新患者数やハイリスクの患者も増加する。また、近年、書類作成業務などの診療業務以外の作業も非常に増加しており、職員は年々ますます多忙になっている。一方、労災病院は勤労者医療を強く意識したりハ診療を展開しなくてはならない。これまでも、頸髄損傷者などの重度障害者への就労支援の報告¹⁾はあるが、就労支援は長期間にわたる入院期間が必要となる。そのような状況にあっても患者の早期職場復帰を推進するため、我々は今回紹介した職場復帰システムを考え試行した。

「復職調査票」を回収できた患者のうち、約1割（無職や学生などを除くと2割以上）が医療専門職の何らかの対応を必要としていた。我々のシステムが導入期であることを考えると、今後そのような患者は増えると推察している。このことは、急性期医療機関における職場復

帰システムを考える上で重要なことで、今後、調査用紙の内容や調査・回収方法を再検討する予定にしている。

我々は、「復職カンファレンス」を行うことで、①患者の職場復帰状況を十分に聞き、患者の個人的問題として画一的に片付けない ②「復職調査票」から職場環境と作業内容をある程度把握しアドバイスをを行う ③必要に応じて入院リハビリプログラムに作業内容を加味する ④職場の労務管理者との面談 ⑤専門的リハセンターなどの紹介といった、職場復帰についての方向性を患者に示すことができたと考えている。

当院における職場復帰支援システムは、まだ十分なものではないが、多くの患者の職場復帰に関する情報を収集し、また、いくらかのアドバイスなどの支援を行う過程で、職場復帰支援を推進する職場意識を高揚することができたと考えている。当院には回復期リハ病棟があり、今後、職場復帰に関しての回復期リハ病棟の運用方法を含め、当院における職場復帰システムを充実させて、勤労者の方に信頼される病院作りに寄与していきたい。

ま と め

急性期医療機関での職場復帰支援を行うため「復職調査票」と「復職カンファレンス」を利用したシステムを試行した。1,149名の患者から「復職調査票」を回収し、その約1割が職場復帰に際して、医療専門職からのアドバイスを必要としていた。「復職カンファレンス」で検討した結果、我々が行った対応は、理学療法士や作業療法士がアドバイスをを行ったものが61.9%であった。復職プログラムを行ったのは6名であり、最終的に全員が職場復帰できた。

文 献

- 1) 藤本哲也, 濱岡憲二, 六名裕美, 他: 頸髄損傷者の在宅就労支援システム ポインティングデバイス操作の操作効率の評価. 作業療法 23巻特別: 237, 2004.

(原稿受付 平成18.2.28)

別刷請求先 〒756-0095 山口県山陽小野田市小野田1315-4
山口労災病院勤労者リハビリテーションセンター

砥上 恵幸

Reprint request:

Keikou Togami
Yamaguchi Rosai Hospital: Japan Labor Health and Welfare Organization, Department of Clinical Rehabilitation Center for Labors, 1315-4. Onoda SanyoOnoda. Yamaguchi Pref. 756-0095, Japan

SUPPORT OF RETURNING TO WORK AT AN ACUTE PERIOD HOSPITAL
—THE TRIAL OF THE SUPPORT THAT USED
“THE QUESTIONNAIRE WHICH RETURNED TO WORK”—

Keikou TOGAMI, Tosikatu TOMINAGA
Yamaguchi Rosai Hospital: Japan Labor Health and Welfare Organization
Department of Clinical Rehabilitation Center for Labors
Kenji KIDO and Youko KUROKAWA
Department of Orthopedic Surgery

For Rousai Hospital, it is a social mission to help return to work for the early stage of a patient. However, hospitalization of a medical institution suddenly shortens now. We developed a support system for returning to work in a hospital for acute period. The method is to know the situation of returning to work of a patient with “Returning-to-work questionnaire”. And it is to examine a method to cope in “Returning-to-work conference”.

I investigated it in periods from June 16, 2004 to August 20, 2005. It was 1,149 that the object was able to collect “the questionnaire which returned to work” with 1,805 patients who had prescription newly. I held the “Returning-to-work conference” for 105 patients. As a result of the conference, there were great many things which a physical therapist and an occupational therapist had advised. In addition, I was not able to perform enough medical examination and treatment for those returning to work since their hospitalization was short. However, I think that I was able to give the directions in returning to work for a patient. Further on, I would like to get involved positively with patients returning to work and for a better hospital to the working men.
